甲虫コレクションガイド 2
愛媛大学ミュージアムの甲虫コレクション

吉富博之
〒 790-8577　松山市文京町 3　愛媛大学ミュージアム

Beetle Collection of Ehime University Museum

Hiroyuki YOSHITOMI

コレクションの歴史

愛媛大学ミュージアムの昆虫コレクション（略称 EUMJ）は，1945 年に愛媛大学農学部の前身の愛媛県立農林専門学校に着任した故・石原保教授がその礎を築いて以来，昆虫学研究室に在籍した教員，学生および多くの協力者の 70 年にわたる努力によって構築されたものである（大林・酒井，2002）．北海道大学や九州大学などの旧帝大のコレクションに比べると歴史は浅いが，宮武睦夫，久松定成, 大林延夫, 酒井雅博, 吉富博之（敬称略）と，甲虫の分類研究者が途切れることなく教員として在籍してきたことから，甲虫類のコレクションは他館に引けを取らないものとなっている．

2009 年には愛媛大学ミュージアムが開館し，同年 8 月にコレクションの全てが農学部からミュージアムに移管され，現在に至っている（図 1–3）．

図1．愛媛大学ミュージアムの昆虫標本収蔵展示室の入り口．向かって左側半分が甲虫のコレクションになる．

【歴代の教授陣】

1945～1984　初代教授　石原　保（1918～1993）
1953～1989　二代教授　立川哲三郎（1924～2013）
1948～1994　三代教授　宮武睦夫（1928～）
1954～1992　四代教授　久松定成（1926～2008）
1993～2009　五代教授　大林延夫（1944～）
1997～2014　六代教授　酒井雅博（1948～）
2014～　　七代教授　小西和彦（1959～）

※最初の年号は在籍期間，カッコ内は生年から没年.

コレクションの概要

愛媛大学ミュージアムの昆虫コレクションはすべての分類群にわたっており，標本点数は約 120

図2．ミュージアムに移動する前の農学部にあった標本室（左）と2009年の移動中の標本（右）．

図3．甲虫コレクション．可動式棚に保管されている．

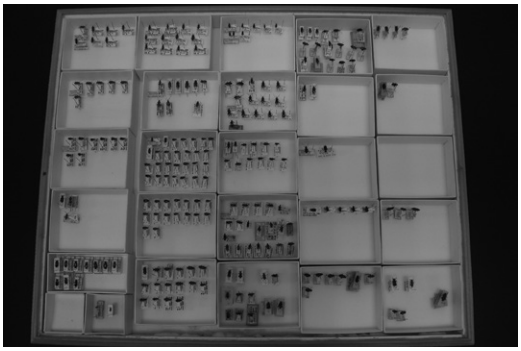

図4．コレクションは大型ドイツ箱に特注のユニットボックスを入れて整理している（写真はネクイハムシ属*Donacia*とキイロネクイハムシ属*Macroplea*）．

図5．タイプボックス．プライマリータイプは一般の標本とは別に保管されている．

万点で，約 4,300 箱の大型ドイツ箱で保管されている（図 4）．石原先生の指揮の下，1970 年代のはじめ頃までには，その当時 2,200 箱ほどあった全目全科の標本のソーティングを行い，内外の研究者の助力も得て，種レベルまで整理が一通り完成した．現在のコレクションの基盤はこの時に確立されたといえる．しかしその後に追加された標本については，教員や学生が研究対象とした科以外は未整理のものが多いが，現在も教員や学生が継続的に整理を行っている．

甲虫類は，コレクション全体の約 70％を占める．しかし，これは標本箱に収められた標本点数に限り，タトウや三角紙等に未整理状態で保管されている膨大な標本はカウントしていない．数は多くないものの幼虫の液浸標本も保管しており，その中でも故・中西秀治氏が研究されたゲンゴロウ科の幼虫コレクションは瓶に 100 点以上ある．

プライマリータイプ（ホロタイプおよびシンタイプ）は約 1,400 点（整理中）で，そのうち約 9 割が甲虫類である（図 5）．ホロタイプは標本写真とともにデータベース化を進めており，既に約 1,200 点については入力済みで，近いうちにウェブ上に公開予定である．

特徴的なコレクション

愛媛大学ミュージアムの昆虫標本は，言うまでもなく日本国内，特に四国のものが充実している．さらには，1970 年代後半以降，国外遠征が容易になったこともあって，教員や学生，卒業生らが東南アジア各地から多くの標本をもたらして急速にコレクションが充実した．中でも集中的な調査が行われたラオスや，酒井雅博先生が調査されたヒマラヤ地域，永井信二氏が収集したインドネシアなどの標本が充実している（図 6）．

甲虫類は，すべての分類群にわたって充実しており，とくにケシキスイ科 140 箱，テントウムシ科 120 箱，ツツキノコムシ科 35 箱，シバンムシ科 20 箱など，教員や学生が研究対象にしていたグループの標本は，国内では比類の無いコレクションである．

佐藤正孝コレクション

愛媛大学の卒業生で，2005 年に亡くなった，故・佐藤正孝博士のご遺族から寄贈された標本である．ゲンゴロウ科など水生食肉亜目 60 箱，ガムシ類 60 箱，ヒメドロムシ類等 40 箱，ジョウカイボン科・ホタル科 60 箱，ジョウカイモドキ科 20 箱など，膨大な量である．現在ではジェネラル・コレクションに加えて整理作業を行っている．特に，ホソジョウカイモドキ科 Prionoceridae，Eulichadidae，クワガタモドキ科 Trictenotomidae などは，収蔵点数も多く世界的なコレクションで，これらを利用した研究成果も多く出されている（例えば Hájek, 2009 など）．また，佐藤コレクションの一部は，未マウントの状態でタトウに保存されている．これらは，地域ごとに，あるいは採集年毎にケースにまとめられていて，研究上重要な標本が見出せることもあり，まさに宝の山である．

安藤清志・中條道夫コレクション

安藤清志博士は，ご自分が専門とするゴミムシダマシ以外のすべてのコレクションを寄贈された．同時に，同氏が保管していた，故・中條道夫博士のコレクションの一部を移管された．中條コレクションは，標本数も少なくプライマリータイプ等は無いが，三重県で採集されたオオルリハムシの標本など，歴史的に価値あるものが含まれている．

文献・別刷コレクション

文献類は，戦前からの貴重な雑誌類のほか，「四国昆虫学会」や「日本昆虫分類学会」が交換雑誌として入手してきた数十にも上る国外の研究機関の出版物も保管されている．また，故・村山醸造博士の蔵書の一部や，甲虫ではないが故・石原保先生の半翅類，ガガンボの大家，故・アレキサンダー（C. P. Alexander）博士のまとまった文献も貴重なものである．別刷コレクションは，分類群に偏りはあるも

図6．2002年のラオスでの学術調査風景．左から若原弘之氏，大林延夫博士，筆者，故・佐藤正孝博士．この前後数年にわたるラオスの調査で採集された膨大な資料はほとんどが愛媛大学ミュージアムに保管され，多くの新タクサが記載された．

図7．2001年に立川先生の喜寿のお祝いの参加者の集合写真．4人の教員（宮武睦夫，久松定成，大林延夫，酒井雅博）のほかに，故・佐藤正孝博士や友国雅章博士などの卒業生の顔があり，愛媛大学ミュージアムの甲虫コレクションを構築してきた面々が集合している．

図8．ミュージアムの標本調査に訪れたウィーン自然史博物館のJäch博士．標本室には机と顕微鏡があり，標本の調査や整理がスムーズにできるように設計されている．

のの，過去に在籍した教員や，故・佐藤正孝博士が収集した物を中心に，著者別，分類群別，あるいは事象別に整理されており，利用しやすい状態となっている．

コレクションのこれから

これからも愛媛大学農学部昆虫学研究室に所属する学生や教員の情熱や研究成果により，昆虫全体のコレクション構築がなされていくだろう（図7）．特に甲虫に関しては，学外からの協力も得て，今まで以上に網羅的なコレクション構築を目指したいと考えている．

ミュージアムのコレクションは，研究者の依頼に応じて随時貸出を行っている．昆虫全体で，標本貸出件数は年間約30件に上る．残念ながら，現在は国外からの貸し出し依頼が多く，日本国内への貸出件数はさほど多くないが，今後国内の研究者，特にアマチュア研究者にも積極的に利用して頂きたい．訪問利用は年間10件程度であるが，こちらもぜひお勧めする（図8）．未整理標本から思わぬ発見があったりするので，自身で探す方がより面白い成果が得られるかも知れない．利用を希望する方は，吉富宛連絡頂きたい．

所蔵標本は，プライマリータイプを除きナンバリングや登録は行わず，流動的なコレクションにしたいと考えている．これは，標本は死蔵せずに利用されてこそ価値があるもので，多くの研究者が自由に利用でき，分類学的研究に役立ってこそ意味がある，という考えに基づくものである．この考えは，高等教育機関である大学にある博物館という位置づけからの帰結で，一般の博物館とは考え方に違いがあるかも知れない．

また，書籍・雑誌や別刷等の文献コレクションも今後さらに充実させて，様々な形で利用できるような方策を考えていきたい．

これによって，若手研究者が甲虫類のあるグループの分類学的研究を志したならば，まずは愛媛大学ミュージアムを訪れ，標本や文献類を利用し，それを基盤として研究をはじめられるような，そんな伝統を構築していきたいと考えている．実際に，ムクゲキノコムシ科を研究されている澤田義弘さん（大阪府立大学出身），ミジンムシ科を研究されている古川恒太さん（北海道大学出身）やホソヒラタムシ科を研究されている吉田貴大さん（現・九州大学）は，研究のスタートに当たって愛媛大学ミュージアムを訪れて標本一式を借出され，立派な成果を出されている（例えばFurukawa, 2010; Yoshida & Hirowatari, 2014）．

謝辞

本報告を纏めるに当たり，倉敷市立自然史博物館の奥島雄一博士，愛媛大学の大林延夫博士，酒井雅博博士，小西和彦博士に原稿のチェックを頂いた．お礼申しあげる．

引用文献

Furukawa, K., 2010. Descriptions of two *Catoptyx* species (Coleoptera, Corylophidae) from Japan. Elytra, 38(1): 11–17.

Yoshida, T. & T. Hirowatari, 2014. A revision of Japanese species of the genus *Psammoecus* Latreille (Coleoptera, Silvanidae). ZooKeys, 403: 15–45.

Hájek, J., 2009. Revision of the genus *Eulichas* Jacobson, 1913 (Coleoptera: Eulichadidae) II. *E. dudgeoni* species group. Zootaxa, 2192: 1–44.

大林延夫・酒井雅博，2002．昆虫コレクション⑫ ― 愛媛大学農学部昆虫標本室．昆虫と自然，37(2)：26–28.

（2015年8月30日受領，2015年9月5日受理）